法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-26

仲宗根政善先生と与那嶺

中根, 千枝 / NAKANE, Chie

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
12
(終了ページ / End Page)
13
(発行年 / Year)
1996-02-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002656

Hosei University Repository

仲宗根政善先生と与那嶺

中根千枝

仲宗根先生とは、ほんのわずかしか直接お目にかかってお話したことがないのに、私にとって先生は最も心に残る数少い方のお一人である。

仲宗根先生に初めてお目にかかったのは、一九六六年八月、調査のため沖縄を訪れたときであった。どなたの御紹介で先生をお訪ねするようになったか、どうしても思い出せないのであるが、あるいは服部四郎先生だったかもしれない。というのは、お会いしたときから仲宗根先生を沖縄の方というより、言語学者として尊敬の念をもって接していたからである。社会人類学の研究のための調査地をどこにしたらよいかをご相談したところ、先生は御親切にご出身地の与那嶺を提案された。そして、先生のお嬢様の御案内で今帰仁村の与那嶺に行ったのが、私にとってはじめて接した沖縄の村であった。

与那嶺には当時、先生の御母堂が御健在で、一人でお家に住んでおられ、御老齢にもかかわらず、毎日御元気に御自分で家事をきりまわされるばかりでなく、農作業もされているのに感心したことである。村の方たちは本当に御親切で、それぞれのお立場で惜しみなく調査に協力して下さり、私は沖

Hosei University Repository

縄の方々のあたたかい心に触れ、大変楽しい滞在であった。続いて翌年（一九六七年）十一月から十二月にかけて再び与那嶺の調査をする機会に恵まれ、与那嶺をとおして、沖縄の村の特色、人々の信仰のあり方（とくにお墓を中心とした諸行事に参加することによって）などは私にとって興味深いものであった。この調査にもとずいて、私は一九七〇年、「門中と村落―今帰仁村与那嶺」（『東洋文化』四十八・四十九合併号）として発表し、将来、より充実した研究に発展させたいと望んでいたが、残念なことに、インドや中国の調査研究に時を奪われ、ついに今日までできてしまった。

しかし、仲宗根先生のお人柄と与那嶺の方々と楽しく過した日々、与那嶺の美しい海の思い出は強く私の心に刻まれている。戦争末期、喜屋武海岸に追い詰められたとき、先生が引率された女生徒に自決を思いとどまらせたために、奇跡的に今日生を受けている方々の感動的なお話は、与那嶺の調査中に知ったことであり、先生の温厚な御人柄、御識見の高さに一層尊敬の念を深くしたものである。先生のお宅には沖縄を訪れる度におうかがいしたが、御奥様、お嬢様たちとあたたかい雰囲気の中でお過しの様子であった。私など想像もできないようなさまざまな御苦労をされた先生ではあるが、御家族に恵まれ、言語学者としても学士院賞・恩賜賞を受賞されたことは、何にもまして喜ばしいことであった。先生の御生涯について知ることの少い私であるが、先生についてのさまざまなお話をうかがうたびに、それらすべてが先生の御人格に凝集されていたような気がする。ひかえ目で思慮深く、誠意とあたたかい心情をもたれていた先生に思いをいたし、ここに謹んで御冥福を祈る次第である。